言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

「聖体の年」によせて

長崎教区司祭
山内　清海

1　教会の源泉であり頂点である聖体

教皇ヨハネ・パウロ二世は、昨年の聖木曜日（4月17日）に、ご自身の教皇在位二十五周年を記念して、新回勅『教会にいのちを与える聖体』を公布され、聖体とカトリック教会との不可分な深い関係について強調されました。さらに去る6月10日には、来る10月（10日～17日）にメキシコのグラダラハラで開催される「第48回国際聖体大会」から来年10月（2日～29日）に開催予定の聖体をテーマにした「世界代表司教会議（シノドス）」までの1年間を「聖体の年」と制定し、全教会に向けて宣言されました。

教皇がこれほど聖体について強調される第一の理由は、「過ぎ越しの神秘」によって誕生した教会は、常に聖体によって生かし育まれながら今日まで成長し続けてきているからです。聖体はまさに教会の源泉であり、生命そのものです。それゆえに聖体は、2000年もの長い歴史を有する教会の活動の原動力となり、頂点であり続けてきたのです。この事実は、今後とも変わることはありません。

そこでわたしたちは、聖体祭儀の中心となる「聖体拝領」やたびたびの「聖体訪問」などを熱心にすることによって、信者の霊的生活や霊的成長には欠かせない「霊的糧」を得ることができるよう心がけることが大切です。

2　聖体祭儀への参加と聖体拝領

わたしたちは洗礼によってキリストのからだの肢体となり、全教会の深い交わりにも入れていただけるようになりますが、その一致は、聖体祭儀に参加することによって更新され、強化されていきます。聖体祭儀でキリストのからだと血をいただくことによって、自分たちの霊的使命を遂行するために必要な霊的な力を得ることができるからです。その意味で聖体祭儀は、福音宣教を本質的な使命とするすべてのキリスト者にとっては、まさにその活動そのものの源泉であり頂点であるといわれるのです。しかもキリストは、わたしたちの宣教活動が効果を上げることができるために、わたしたち全キリスト者の信仰による一致を祈られました（ヨハネ17・11～23参照）。

このキリスト者間の一致を成就させるには、聖体拝領が不可欠となります。聖体拝領によって、わたしたちとイエスとのつながりが強められる（ヨハネ6・57、15・4参照）だけでなく、聖パウロが教えているように、同じパンを食べ、同じ杯を飲む者同志の一致も深められるようになる（Ⅰコリント10・16～17参照）からです。

3　聖体訪問

聖体祭儀との深いつながりがあるものの一つに、聖体礼拝があります。わたしたちは、教会の長い歴史の中で伝統的に大切にされてきた「聖体訪問」のすばらしさを忘れてはなりません。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」（マタイ28・20）というイエスの約束は、まずは聖体祭儀を通して、そしてそこで聖別され聖ひつに保存されている聖体そのものを通して文字どおり成就され、今なお実現され続けているからです。

聖ひつの中におられるイエスは、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ11・28）と、いつもわたしたちをやさしく招いておられます。キリストに愛されていた使徒ヨハネが最後の晩餐の席でイエスの胸元によりかかった（ヨハネ13・25参照）ように、わたしたちがしばしば聖体を訪問して聖ひつのイエスとともに過ごす習慣を身につけていくならば、そのイエスは、わたしたちに天国の生活のすばらしさの幾分かを体験させてくださるうえに、日常の福音宣教のよろこびも味わわせてくださるに違いありません。

み言葉の分かち合いとは（3）

主をお迎えして始める

前回は『み言葉の分かち合い』と『聖書研究』との違い」について考えてみました。聖書講座や聖書研究会などが講師や自分たち自身が主体となって行われるのに対して、み言葉の分かち合いは、主キリストをお迎えしたうえで、その集いの中心に座って私たちに語りかけられる、キリストのみ声にじっと耳を傾けながら行われます。

1　祈りの種類

み言葉の分かち合いでは、「自由な祈り」が大切にされます。そこでその「自由な祈り」とはどういうものなのかを理解するために、まず「祈りの種類」について確認しておくことにいたします。

祈りにはいろいろな形ややり方がありますが、私たちがもっとも慣れ親しんでいるのは「口祷」と呼ばれるものです。この口祷以外にも、「念祷」や「黙想」、さらに「観想」などと呼ばれるさまざまなタイプがあります。

「口祷」にもいろいろな形があります。一般的には声を出して祈るのが口祷だと考えられていますが、声を出さずに心の中だけで祈っても、「ことば」を使って祈るものであればすべてが口祷と呼ばれます。

私たちがもっとも慣れ親しんできたのは、声を出すタイプの中の「定型の祈り」、すなわち祈祷書を用いるかそれを暗唱するかして、すでに作成されている祈りを声に出してするタイプのものです。しかしそれ以外にも、その場で心に浮かんだことをそのまま声に出したり心の中で申し上げたりする形の、「自由な祈り」というものもあります。

2　集会を始めるときの祈り

これまでの私たちは、さまざまな会合を始めるときには祈祷書にある「始業の祈り」や「主の祈り」などをみんなで声をそろえて唱えるのが一般的でした。しかし「み言葉の分かち合い」の集いを始めるときには、そこに主をお迎えするために参加者たちが交互に「自由な祈り」をしてそれ以外の人たちはそれに心を合わせて共に祈る、というタイプの祈りをするのが効果的だといわれています。

最近はさまざまな集いの場で、「自由な祈り」と「定型の祈り」とを組み合わせた形の始めの祈りや終わりの祈りをすることも多くなってきたようですが、改めて「主をお迎えする」ための自由な祈りをしようということになると、そうたやすくできるものではありません。

「み言葉の分かち合い」にもいろいろな種類があるということを前回学びましたが、ほとんどどのタイプの分かち合いでも、「第一段階」にあたる開会の部分では、この「主をお迎えするための自由な祈り」をして集いを始めることになっているようです。

そこで今回は、この「主をお迎えする祈り」をどのようにすればよいかを、「7段階法（セブンステップ法）」を中心にしながら考えてみることにします。

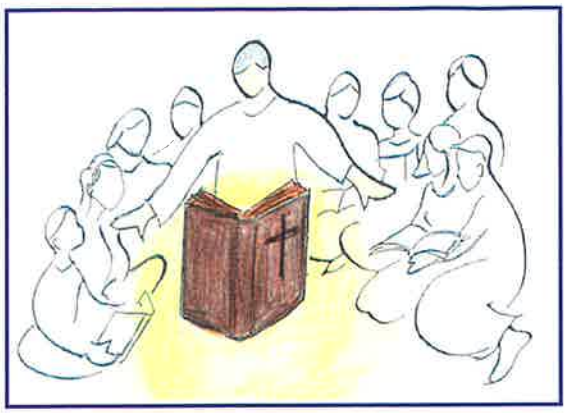
3「第一段階」の進め方

参加者たちは聖書と聖歌集を持って集まり、テーブルの回りに座ります。椅子に座っても畳の上に座ってもかまいません。そしてそのテーブルの上には、前もってローソクを置いておきます。司祭や修道者が参加する場合も、特別な

席は用意せず、信徒たちと同じ席に同じ立場で座ります。

進行係は、できるだけ参加者たちが聖歌を歌って集いを始められるように心がけます。その聖歌が終わったならば、「この集いに主をお迎えしましょう。どなたか、何人でもけっこうですので、主キリストをお招きする祈りをしてくださいませんか」と言って、参加者たちに「自由な祈り」をしてくれるように頼みます。

それに応えて参加者の数名が、自発的に、「この集いの中に主キリストにおいでいただき、一人ひとりに語りかけ、集いを導き、力を与えていただきたい」という趣旨の自由な祈りをします。これは「招きの祈り」と呼ばれるものですが、祈祷書の祈りに慣れ親しんできた私たちがそのコツを会得するまでには、しばらく時間がかかるかもしれません。



何名かが祈り終わったならば、主がおいでになったことを表すために、準備していたローソクに火を灯します。主がそこにお座りになることができるように、一つだけ空席を設けておくのも効果的だといわれています。

4「自由な祈り」の作り方

初心者が「自由な祈り」を作ろうとするときには、自分がよく知っている聖書の場面を心に思い浮かべながら行えばそれほど難しいものではない、といわれています。「聖書の中でキリストに語りかけているこの人物は自分なのだ」という気持ちをもって主に話しかければよい、というわけです。

「招きの祈り」を作るために参考になる聖書の箇所を挙げるとすれば、たとえば次のようなものがあります。

①ルカ24・28～31
（エマオへ向かう道で、二人の弟子が主をお招きする）
②ルカ10・38～39
（マルタ姉妹がイエスをご招待する）
③ヨハネ2・1～2
（イエスがカナの婚礼に招かれる）
④マルコ5・21～24
（ヤイロが、娘を癒していただくためにイエスをお招きする）
⑤黙示録3・20
（戸口に立ってたたいている主を、家の中にお入れする）

主をお招きするときには、かしこまった感じではなく、自分の家族や親しい友人に話しかけるような気持ちで行います。そうすると、ことばは以外にすらすらと出てくるものです。

即席の祈りを作るのは難しいと感じるような人は、前もって自作の祈りを紙に書いておき、その場ではそれを読むだけにしてもかまいません。そんなことを何度か繰り返しているうちに、「自由な祈り」をするのはそれほど難しいものではない、と感じられるようになるに違いありません。

5　主の現存を実感する

主キリストは、「二人または三人がわたしの名において集まるところには、わたしもその中にいる」（マタイ18・20）と約束してくださいました。私たちが「主をお招きする祈り」を心を一つにして行った後で、ローソクの火が灯され、主のために用意された席が空けられたままになっている状況の中にいると、そこに主がおいでになっている、という実感が自然にわいてきます。たとえまだその実感がわいてこない人がいたとしても、主はすぐ近くまでおいでになっているに違いない、という感じにはなるはずです。

そういう状態になれば、その日の集いを始めるための準備はすっかり整ったことになります。後は、主のみ声にじっと耳を傾けさえすればよいのです。私たちのグループの一人としてそこに座っておられる主は、私たち一人ひとりに大切なことを語りかけ、集い全体をお望みの方向へ導いてくださるに違いありません。

【シリーズ】

現代を生きる信仰

―どう理解すれば？―

宮川俊行（みやかわ　としゆき）
長崎教区司祭

オリンピックとカトリックの信仰

学ぼう

オリンピック

アテネで五輪が開かれ、日本選手の活躍に刺激され、大量のにわか民族主義者が発生した今年の８月だった。人の好みや楽しみはまちまちだから、スポーツ競技など嫌いだという人は多いだろうし、自分にはまったく関心がないという者も少なくないであろう。しかし、日本人を含む世界の多くの者がスポーツ競技に関心を抱いており、スポーツは今や現代文化の無視できない一要素となっていることは否定できない。

選手たちの「行うスポーツ」

オリンピックの中心は「行うスポーツ」で、諸国家から選び出されてきたエリート選手である個人や団体が、「より速く、より高く、より強く」と勝敗や順位や記録を競う真剣勝負である。今回のアテネ五輪では２０２の国と地域からの選手は約一万八百人ほど、日本は３１２人だった。

大衆参加の「観るスポーツ」

しかし選手たちは、競技を成果や経過に関心をもって見守る観客の前で行った。歓声を挙げたり拍手をしたりと応援に夢中になっている人たちである。今回は競技場に足を運んだ約２００万人の観客がいたという。だが、かれらは観客の中のごく小部分だった。世界中の無数の人々はテレビで視聴（以下、ラジオの中継によるものも含める）した。日本人のほとんども茶の間での視聴観戦だった。

現代スポーツは「行うスポーツ」としてではなく、特にテレビで「観るスポーツ」という形で大衆のものとなっているというが、今回のオリンピックも、テレビを通して世界中のあらゆる地域の家庭から観戦に参加する無数の人々なしにはありえなかった。「観るスポーツ」大会となればテレビ映りの良し悪しも重要となるから、演技の「美しさ」を評価の中心的基準とするスポーツも最近は競技の中に入っている。

こうして、栄光を目指ししばしば国威発揚さえ賭けて全力で記録や勝敗に挑む選手たちと、これを期待や希望や不安を心に抱きながら観戦する世界中の大衆、の両者から形成されているのが、現代のオリンピックである。

カトリックの信仰とオリンピック

それゆえオリンピックは、世俗の組織が企画しわれわれも含め世界中の大衆も参加して行われる、国際スポーツの大祭典である。教会が直接的に関わる宗教の事柄ではない。改善の必要なさまざまな倫理上の問題点を抱えていることも周知のとおりである。

だが、オリンピックにはカトリックの信仰の立場から見て、意義ある諸面が含まれている。現代教会にとってスポーツは無視できないテーマの一つとなっており、近代諸教皇も、いろいろな機会に、司牧者としてこの問題に関してあれこれの発言を行っている。

＊人生の重みを意識させる

実力紙一重の選手たちが、長年にわたる克己と鍛錬と準備の上、偶然に翻弄されながらひたむきにメダルという「地上的な」栄冠を目指して全力をつくして競い争っている真剣な姿は、観る者を感動させる。しかし、キリスト信者にとっては、それだけではない。「不滅の」栄冠であるイエス・

キリストを与えられることを目指す戦いの場である自分の人生の価値の重さを、改めて意識させられる場面でもある。このことをすでに聖パウロはコリントの信者たち宛の手紙の中で指摘しており（Ｉコリント９・24～25）、現教皇もその説教や謁見における公式談話などで繰り返し語っている。

＊世界平和への貢献

五輪のシンボルマークに見られるように、本来オリンピックは地球平和の実現を目指している国際祭典である。スポーツを通した親善を意図し、世界中の人たちの出会いと交流、相互理解と調和、平和と協力を目指している。特に現代では「行うスポーツ」は同時に「観るスポーツ」になっているので、全世界の無数の人間がこれに関わっていることになる。現在の地球は国民国家を基礎にした世界であるため、諸国家代表者の競技とはなるが、政治・言語・歴史など文化的多様性の中に生きながらも、「共通のルール」や公平と平等の条件下での競い合いが、全世界の無数の人々の納得と注視の中で行われている現実は、世界的規模での平和と親睦がすでにある程度実現していることを示していると取れよう。

第二バチカン公会議でもスポーツの意義についての議論があり、「現代世界憲章」61項も「オリンピック」を暗示しながら、生活条件や国籍・人種を異にする者たちの間に平等で信頼と親睦の関係を作り上げるものとして、スポーツ国際競技大会の大きな役割に注目している。教皇ヨハネ・パウロ二世も去る８月５日正午、カステルガンドルフォで世界各地からの巡礼者たちや地元の信徒たちに行った説教の中で、開催の迫っているアテネ五輪に言及し、さまざまな形での暴力や憎しみによる混乱が続いている世界の現状を変えることを期待していると、強い関心を表した。国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）は政府、国連、ユニセフなどと並んで現代世界で平和建設のため効果的な働きのできる世俗の力の一つとなっており、今や教会にとっては重要な同志である。カトリックの信仰は、オリンピックを地上の平和実現のために聖霊が用いておられる手段と受け止める。

＊神を求める万人の心の現れ

「聖」なる火を中心とする大会、厳粛な雰囲気の下で観客を含めた全参加者を前に神妙にフェアプレーや公正な審判を「誓う」選手や審判員たち、友好や相互愛を印象づける開会式・閉会式の演出。万人注視の中で選手たちが燃焼する「聖なる」空間としてのスタジアムと「聖なる」時間である競技時間。こう並べてみれば、オリンピックは宗教行事の色彩を帯びた祭典であることが分かる。

人の心の底には真の神との一致また真の神における全人類との一体化を求める願望が秘められていることを、カトリック哲学はオリンピックにおいて改めて痛感する。ここで参加者たちは身体の可能性の限界に挑んでいるが、自分では気づいていないだけで、究極的には真の神との一致を目指しているのである。限界に迫ろうとか、より高いものを目指そうとする人の意欲や努力は、心の底に最高の神との一致への憧れがあるからこそ可能となる。また参加者たちは、真の神における万人の一致という自分たちの究極の願いを、オリンピックという人工的に作り出した世界で「遊び」の形で満たそうと努力しているのである。

カトリックの信仰の立場では、真の神は三位一体の神として礼拝されねばならないのに、ここでは「知られざる神」（使行17・23）として意識せずに崇められているに過ぎない、という大きな不満は残るものの、既成宗教が表に出ると人類の和合を妨げることが多いのが残念ながら現実である。このように、超自然を意識せず人類が真の神とのまた神における万民の一致の願望を不十分ながら満たそうとしている懸命の努力と取られうる、オリンピックの意義は大きい。

前号本欄の「使徒信条」のことばの中で、「生者」とすべきところを誤って「正者」としてしまいました。ここに訂正し、お詫びいたします。

小教区ピックアップ

永久聖体礼拝
― 西町教会 ―

長崎教区では、毎年「カトリック教会祝日表」で「聖体の永久礼拝日」として各小教区を指定し、祈りを継続している。

西町教会では、２０００年を期にこの永久聖体礼拝のやり方を改善したことによって、さらに、家庭をつなぐ「祈りのリレー」へと発展し、それが実を結んでいると聞いている。そこで今回は、そのことについて主任司祭と信徒会会長のお二人に伺ってみた。

◆◇どのようなことがきっかけとなったのですか◇◆

１９９８年に、西日本宣教大会が福岡で行われました。そのとき、熊本では、各小教区が順々に担当していく形の、昼夜を通した聖体の永久礼拝が５年くらいも続いている、と伺ったのがきっかけでした。

２０００年の大聖年に教区全体で「祈りのリレー」が行われ、担当小教区は1週間祈るようにと言われたとき、その1週間を昼夜の聖体礼拝に当ててはどうか、と提案してみました。この年には祈りのリレーが2回も回ってきましたが、2回ともこの昼夜の聖体礼拝を行いました。

そこで、これをこれだけで終わらせるのではなく、何とか継続させることができないものかとみんなで考えて、現在のような形の聖体礼拝が生まれました。

◆◇その「聖体礼拝」はどのような形でなさっているのですか・・・◇◆

教区指定の永久礼拝日の前日午後5時のミサ後から当日午前9時のミサ前までの時間を、小聖堂での「1時間交代の祈り」でつなぐ形にしています。参加申込書にご自分の都合の良い時間を記入していただいたうえで、担当時間を確定しています。

その時のための祈りの資料は準備してはいますが、すべてをその人、そのグループに任せて、沈黙で祈っても、聖歌を歌っても、聖書を読んでもよいというぐあいに、自由な形で祈れるようにしています。

皆さんの協力によって、これまで毎年続けることができました。

◆◇この永久礼拝から家庭をつなぐ祈りのリレーへと発展したと伺いましたが・・・◇◆

この聖堂で行われる永久礼拝の恵みを小教区共同体のそれぞれの家庭が受け継ぐという願いを込めた、「家庭をつなぐ『愛と平和の祈りのリレー』」という形へと発展していきました。

それは、２００１年の永久礼拝指定日の8月26日（日）の9時のミサの中で行われた、「出発式」からはじまりました。

「十字架」と「大天使ガブリエルのマリアへの受胎告知のご絵（木製の観音開きの置物）」とを「祈りのリレー巡回記録芳名録」を添えて、申し込みをした家庭に1週間ずつ巡回しています。次の家庭へは9時のミサの派遣の祝福のときに引き継ぎます。

家庭での祈りの条件として上げているのは、少なくとも毎日ロザリオ1連を捧げる、子どもがいるところは子どもが先上げをする、家族が一緒に集まることができなければできる人だけで祈る、という程度です。

◆◇これまでの反響はどうですか・・・◇◆

「祈りのリレー巡回記録帳」には、教会に来れない人や近所の人たちを誘って一緒に祈ったとか、定年退職をされた方がこれをきっかけに毎晩夫婦で祈るようになったなどということも書かれており、実にさまざまな反響がありました。

今年で4年目に入りましたが、1年に52家族に回るので、すでに156世帯が終ったことになります。これからもこのリレーをできるだけ多くの家族のもとへつないでいきたい、と願っています。

Catholic Archdiocese
NAGASAKI

かわいがられた記憶

「子どもはかわいがって育てなさい」と、よく言われます。

ある新聞に、一人の主婦が手記を寄せていました。

「私は長女として生まれ、幼い時から手のかからない良い子だと言われて育ちました。私だって子どもの頃は親に甘えたかったし、弟や妹たちのように母親に抱っこしてもらいたいと、いつも心の中で思っていました。でも、“しっかり者のお姉ちゃん”と言われてきた私は、“抱っこして！”の一言を母親に言えず、一人で泣いたことも度々ありました。私は、結婚して初めて、人の温もりや幸福感、安心感というものを味わい知ることができました。」

しっかり者と言われても、しょせん、子どもは子どもです。親に抱っこされてかわいがってもらいたいのはどこの子も同じで、親に抱かれることによって子どもは親の愛情を確かめ、安心感や満足感という宝物をもらうのです。そして、愛されているという実感は、生きる力や人を愛するという豊かな感性を心の中に育み蓄えていくのです。だから、子どもは誰でも、かわいがられて育てられなければならないのです。

子どものころの「かわいがられた記憶」は、その後のその人の心にいろいろと重大な影響を及ぼしてくるのです。

「誰も知らない」という映画が話題になりました。実際の出来事をドラマ化したものだそうです。

３人の幼い子どもとその母親は、貧しい中にも明るく愛情いっぱいの生活をしていました。ところが、ある日突然、その母親が幼い子どもたちを残して蒸発してしまいます。なんと無責任で身勝手な母親でしょう。いったい、この幼い子どもたちにどう生きていけというのでしょう。誰もが憤りを覚えますが、こんなことは、最近、あまり珍しくないことだそうです。

母親がいなくなった幼い子どもたちはどう生きたのでしょうか。

残されたこの子どもたちは、周囲の大人たちがそのことに気がつくまでの数カ月間を、実にたくましく生きていたというのです。彼らは、幼いながらも互いに協力し、時には悪知恵も働かせながら、実にしたたかに生き抜いていました。その姿は、敗戦直後に路上生活をしていた戦災孤児を思い起こさせるほどであったといいます。

このたくましく生き抜こうとする子どもたちの意欲とエネルギーは、いったい、どこから湧き出してきたのでしょうか。誰もが知りたいと思うことです。この疑問に答えて、ある学者は語っています。

「幼い子どもたちを残して失踪（しっそう）したこの母親は、実に無責任で刹那（せつな）的な人間です。しかし、この母親は、少なくとも子どもたちと一緒にいる時間は子どもたちを心から可愛がっていました。幼い子どもたちの心には、母親に“可愛がられた記憶”がしっかり刻み込まれていたのです。この“可愛がられた記憶”が、子どもたちに生きる意欲と頑張る力を与えたのです。」

きょう、ぼくのたんじょう日でした。
友だちがいっぱい来てくれました。
夜、お母さんが、
「あんなに小さかったのに、
こんなに大きくなってー」
と言って、ぼくをだっこしてくれました。
とっても、うれしかったです。

小学３年生の日記です。３年生の子どもだって親に抱っこされるのはうれしいのです。「抱っこ」の幸せ感は、抱っこされた者だけでなく、抱っこした者にも神様は同じように味わわせてくださるのです。これこそ、神様が子どもたちを大切にされている証しなのでしょう。　　（にしむら　よしを）

生活の中の教会

殉教の島

「生月」は平戸島の北西に位置する周囲約三十キロの島。港を整え、水産基地として長く栄えてきた。

この地に福音が伝えられたのは一五五〇年代にさかのぼり、数々の史跡が殉教の島を彩っている。

生月島最初の殉教地「ガスパルさま」、多くの殉教者の遺骸を埋葬した「山田の千人塚」、教会跡地の「焼山」、親子三人の殉教地「ダンジクさま」、胎児も含む八人の殉教地「八体龍王」、信仰ゆえに追放された一部家の屋敷跡「お屋敷山」など・・・。

「山田」に建つ教会堂は、一九〇九年、鉄川与助の設計・施工のもとで工事が始められた。当時、信徒の世帯は十七戸。マタラ師と信徒たちは資金繰りに困窮し、不足分は借りたという。

二年がかりで完成にこぎつけたその教会堂は、翌年コンパス司教によって祝別され、「七つの悲しみの聖母」に捧げられた。

今、教会堂の正面玄関には、トマス西神父の列聖記念碑が建つ。老若男女に及ぶ数多くの「生月」殉教者の命をかけた生涯は、歴史を訪ねる者たちを圧倒する。

山田教会

フォトプラン 山本 富夫